

令和4年度病害虫発生予察情報 特殊報 第3号

令和4年9月27日
広島県西部農業技術指導所

1 病害虫名 ネギハモグリバエB系統 (*Liriomyza chinensis* Kato)

2 発生作物名 ねぎ

3 特殊報の内容 広島県における初発生

4 発生経過

(1) 発生確認年月日 令和4年8月21日

(2) 発生地域 広島県南東部

(3) 確認の経緯

令和4年8月、広島県内の露地ねぎ栽培において、ネギハモグリバエの著しい食害が発生し、ほ場内のほぼ全ての株で、葉の白化が発生した。被害状況が、他都府県で発生が認められているネギハモグリバエB系統によるものと類似していたことから、採取した幼虫を飼育し、羽化させた成虫を国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構野菜・花き研究部門に同定を依頼したところ、本県で未発生のネギハモグリバエB系統と同定された。

(4) 他県での発生状況等

本害虫は平成28年に京都府で初めて確認されて以降、現在まで35都府県で発生が報告されている。中国地方では鳥取県、山口県、島根県、及び岡山県で発生が確認されている。

5 生態および被害

幼虫はうじ虫状で、成長すると約4mmに達する(写真1)。蛹は約3mmで褐色、俵型である(写真2)。成虫は約2mmであり、胸部と腹部は黒く、その他の部分は淡黄色である(写真3)。外部形態によるA系統との識別は困難である。両系統ともに、成虫は葉の組織内に産卵し、ふ化した幼虫は葉の内部に潜り込んで葉肉を食害する。成長すると葉から脱出し、地表又は土中で蛹になる。

B系統はA系統と比べ、1葉あたり寄生幼虫数が多く、集中的に葉肉を食害する。そのため、連続的に食害痕が形成され、加害が進むと近接した食害痕が混ざり合い、葉が白化する(写真4)。A系統と比較すると、より激しい被害となる。

6 防除対策

- (1) 被害葉および収穫終了後の茎葉は発生源となるため、土中に埋設するかビニール等で被覆するなどし、適正に処分する。
- (2) 本種の防除には、ネギハモグリバエまたはハモグリバエ類に登録のある薬剤を使用する。
- (3) 定植時には、育苗トレイかん注、または粒剤を施用する。
- (4) 薬剤によっては中老齢幼虫に対する効果が劣る場合があるため、若齢期の薬剤防除に努める。
- (5) 多発すると防除が困難になることから、発生初期の防除を徹底する。
- (6) 抵抗性害虫出現防止のため、同一系統薬剤(IRACコードが同じ剤)の連用は避ける。



写真1 ネギハモグリバエの幼虫



写真2 葉肉から脱出した蛹

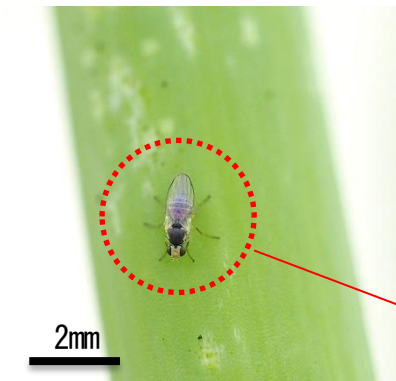


写真3 ネギ葉上の成虫



写真4 B系統の食害により白化したねぎ



成虫拡大写真

○病害虫発生情報に関するお問い合わせ先

西部農業技術指導所（植物防疫チーム）（〒739-0151 東広島市八本松町原 6869 電話082-420-9662）

広島県立総合技術研究所 農業技術センター生産環境研究部

（〒739-0151 東広島市八本松町原 6869 電話082-429-0521）

農林水産局農業技術課

（〒730-8511 広島市中区基町 10-52 電話082-513-3559）

○病害虫発生予察情報は、広島県ホームページで閲覧できます。

<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/byogaichu/>